

トップ登場

水道は命に直結する最重要ライフライン



東京都公営企業管理者水道局長
醍醐 勇司 氏

2020年に東京五輪、2018年にIWA総会が開催される東京都。その水道局のトップに今年7月、醍醐局長が就任し、新執行体制がスタートした。総務局をはじめ多様な職務を経験された醍醐局長に、長い歴史のある東京水道への印象、トップとしての抱負、また今後、東京都が展開を図る当面の施策の方向性などについて伺った。

水道事業に携わって

——醍醐局長は、これまで多様な職務を経験されてきたと伺っております。これまでの仕事で印象に残っているものをお伺いします。

まず印象に残っているのは、主査として経験した総務局人事部人事課での仕事です。この時は、全庁を相手として、各局とシビアな調整を行う毎日でした。ただ、この時期に都庁の仕事の仕方を覚えたのかな、と思っています。すなわち、「ベストの判断をする」のは無理なことであり、様々な利害関係の中で「ベターな判断」による最大公約数の仕事をするということ。そ

ういう意味で、この時の厳しい経験が、管理職になるための修練となったと感じています。

次に、管理職に昇任して初めての職場であった、府中病院の医事課長です。医師や看護師といった専門職の世界で、専門用語一つわからない。一方で患者さんからのクレームや訴訟も受けなければならない。ただ、地道にそれらをこなすことで、現場との信頼関係を築くことができました。

また、忘れようとしても忘れられないのは、総務局総務部長の時にあった東日本大震災への対応です。その日は都議会の閉会日で、挨拶回りで議会棟にいる時にちょうど地震に遭遇しました。窓から都庁舎を見ると、いわゆるツインタワーが左右に大きく揺れている。その時から、昼夜を問わず全庁の調整に走り回る日々が始まりました。この後に就任した危機管理監時代も含め、この時の苦労話だけで何日でも話ができますよ。

——そうした中、今回初めて水道事業に携わることとなりましたが、水道事業の印象、また着任して1ヶ月以上たった感想をお聞かせ下さい。

確かに直接水道事業に携わるのは初めてですが、実はこれまでも親しみを感じていました。というのは、瀬田副知事（水道局出身で総務局長等を歴任した後、副知事に就任）の秘書担当副参事をしていた時に、副知事との交流から、水道人としての矜持を実感するとともに、日水協の赤川顧問や尾崎理事長ともお知り合いになりました。

その上で実際に着任してみても印象としては、事業としてはとてもシンプルですが、非常に奥が深いということです。水道事業（もちろん工業用水道事業も行っていますが）という1つの事業の中にも、水源から取水・導水・浄水・配水・給水、そして営業所など、様々な部門がそれぞれの取組を行うことで、お客さまに安全でおいしい水を安定的に供給することができて

醍醐 勇司(だいご ゆうじ)氏の プロフィール

昭和55年早稲田大学法学部卒業後、57年4月に入庁(総務局商科・立川短期大学事務局庶務課)、平成6年府中病院事務局医事課長、平成9年総務局知事室副参事(副知事秘書担当)、平成16年病院経営本部経営企画部総務課長(統括)、平成17年産業労働局参事(株)東京国際フォーラム派遣)、平成21年総務局総務部長、平成23年危機管理監、平成24年収用委員会事務局長、平成25年病院経営本部長を経て、平成27年7月から現職。

昭和33年3月生まれの57歳。

います。

着任以降、いろいろ事業の説明も受けましたが、「実際に現場を見なければ体得できたとは言えない」との思いのもと、この1ヶ月ちょっとの間にいくつもの現場を訪問してきました。特に印象深かったのは、水源林を視察した時です。水道局が水源林の管理のために、多くの林業職の職員を配置し、治山や林道の整備まで行っているというのを聞き、水道局の職域の広さに心底驚きました。

——その水道局の局長として局を切り盛りしていくこととなるわけですが、抱負や心構えをお伺いします。

東京水道は、1300万人の都民生活と首都東京の都市活動を支える重要なライフラインです。そして、そのレベルは今や世界最高といっても過言ではないほど高いものとなっています。

これは、110年を超える東京水道の長い歴史の中で、諸先輩方の大変な努力により作り上げられてきたものです。それを一から変えるなどということは毛頭考えていませんし、やってはならないと思っています。ですので、基本的にはこれまでの経緯や伝統を守りながら、現在の高い水準の東京水道の事業・経営状態を維持し、継続していきたいと思います。しかし、一方で世の中は大きく変化しています。2020年、5年後には東京オリンピック・パラリンピックも開催されます。そうした時代の変化、あるいは社

会の要請に対し、新たな視点で工夫できるところ、見直すべきところは変えていく必要もあると考えています。

その上で、水道事業に関わる心構えとして、異動が決まって以来、心に留めていることがあります。それは、「水道事業に携わる以上、水道を好きになる」ということです。特にトップである身としては、「水道を心から好きになれないのであれば、トップになる資格はない」と思っています。そして、この1ヶ月ちょっとを経験し、様々な現場も実際に見て、本当に面白く、好きになれる事業であると確信しています。

日々が危機管理という意識を持ち

——先ほど、印象に残っている仕事として東日本大震災への対応を挙げられていました。水道も重要なライフラインではありますが、震災に対する備えについて、どのように考えていらっしゃるのでしょうか。

他のライフラインもみな重要ですが、水道は特に、水がなければ人は3日と生きられないという意味で、まさに命に直結する最重要のライフラインだと考えています。そのため、昨年6月に策定した「東京水道施設整備マスタープラン」においても、大規模災害時に水道施設の被害を最小限にとどめ、給水を可能な限り確保する方策を整理いたしました。具体的には、水道管路の耐震継手化10ヵ年事業や、導水施設・送水管の二重化・ネットワーク化などです。一方でソフト面としても、毎年度実施している様々な想定での訓練や、局の「大規模災害対策検討委員会」での検討などを踏まえ、レベルアップを図っているところです。

震災以外にも、漏水や断水事故など、水道局は日々対応に迫られる可能性を抱えています。そういう意味では、水道局は日々危機管理の局です。先日、局の全ての管理職の参加した会議でも言ったのですが、職員、特に幹部が、常に危機管理に対する意識を持ち、いざ事故が起きた時には、冷静に、また逃げずに対応するという心構えを持って日々の仕事に臨むことが重要であると考えています。

——東京都水道局には、その他にも様々な課題があると思いますが、それらに対する対応についてもお聞かせいただけますか。

個々に挙げれば、浄水場の計画的な更新、多摩川系の水質の課題に対する対応など、数え切れないほどの課題があります。

それらを包括して言えば、今年度は現行の「東京水道経営プラン2013」の最終年度であり、次期経営プランを策定する年でもあります。既に局内では様々な検討に着手していますが、各種の課題を解決するための方策を真摯に議論し、効率性や費用対効果も勘案しながら、さらにはお客さまサービスの向上も考慮しつつ、これからの東京水道の発展に向けたプランを局一丸となって作り上げていきたいと思っています。

更なる技術開発を

——最後に、水道鋼管に対して期待することなどございましたらお願いします。

私は当然、水道の技術専門職ではないので、局の技術部門から聞いた内容をお話することになります（笑）

東京水道の水道管路は、地球半周以上の延長に相当する約27,000kmを有しています。その中で、鋼管は、口径400mm以上の管路の約1割で採用しています。このように、鋼管は、都内の安定給水に欠くことのできない水道管網の形成に関わっています。

ところで、災害時に一刻も早く水道の復旧を進めるためには、管路の耐震継手化を積極的に進める必要があります。しかし、都内では、昼夜にわたる生活環境や道路交通などを十分に踏まえたうえで工事を行う必要があるため、一朝一夕にはいきません。現在、計画を大幅に前倒して、管路の耐震継手化を進めています。現在のペースでも全延長27,000kmの更新には、単純計算でも50年の年月が必要となっています。

このような状況で鋼管も寿命があることから、現在進めている、耐震性能に優れ断層変位に対応するものや、日本水道鋼管協会が策定した「長寿命形水道鋼管」のように管路を長寿命

化するような技術開発は、今後も積極的に進めてもらいたいと考えています。

当局においても、口径1500mmの内側に1350mmの配管を行う更新に際し、パイプ・イン・パイプ（PIP）工法を採用するとともに、屈曲部の現地塗装部において、長寿命化塗装の試験施工を行うなど積極的に採用しております。

今後も、前述したような生活・道路環境の中でPIP工法、SDF工法などによる更新を積極的に採用し、耐震化を進める予定です。特に、SDF工法は現在、400mmまでの口径と聞いておりますが、更新口径の需要に合わせ、口径のアップなどの必要性も出てくるのではないかと考えています。

その他にも、鋼管は、現在使用している大口徑路線の代表格として、昭和41年完成の朝霞・上井草線の口径2700mm・全長約12kmの送水幹線や、昭和39年に通水した利根川系と多摩川系の原水を相互融通する朝霞・東村山間の原水連絡管の導水管でも口径2200mm、全長17kmのうち、高い水圧のかかる朝霞側の約9km部分など、様々な場所で採用しています。

鋼管は、都内の安定給水に欠くことの出来ないものであるとともに、現場状況に適応した工法を採用できるなど、多くの利点があることから、引き続き、調査・研究を進め、水道事業に貢献して頂くことを期待しております。

——ありがとうございました。



パイプ・イン・パイプ工法の施工状況